特集　我が家のペット

犬の生活

二階堂　元重

家内が超イヌ好きでかねてより「犬の生活」を夢見ていたが、在局中は転々とアパート、マンション住まいを繰り返した為それもかなわず、6年前「終の棲家」を構えほどなく二人の娘も巣立ったため、ごく自然な成り行きでイヌを飼おうということになった。

元々血統にはこだわりはなく小諸の動物愛護センターで分けてもらうことも考えたが実行には至らず、とりあえず近所のケンネルに出向いたところ、お店の隅のケージにひっそりと座りこっちを見てた黒いラブラドールを発見、即決した。数週間後同じお店に周辺グッズを買いに行ったところ今度は丁度同じ背格好の黄ラブがいて元気に尻尾を振りつつやっぱり目が合ったものだからまたも衝動的に購入してしまった。

2頭とも3ヶ月メスでそれぞれを「ユキ」「アキ」と名づけた。

こうなったらチョコレート色で「ミキ」と韻を踏み、ラブの三色そろい踏みをもくろんでいたがこれがなかなかのレアモノでお目にかかれないでいる。今年で6歳になった。

昔から実家ではイヌを飼ってたし、「イヌ派」か「ネコ派」かと聞かれれば間違いなく「イヌ派」ではあるのだけれど、正直最初はウンコやシッコの始末が嫌だったし、散歩もおっくうだった。

しかし成長と共にしつけた分だけ利口になり、次第にお互いの表情の変化まで読み取れるようになってくると考えは変わってくる。

ウンコやシッコは何とも思わないし第一臭いと思わなくなった。

それどころか毎日2回歯まで磨いてやってる。散歩も嫌じゃなくなったし健康にもいい。時折撫でてほしいとばかり体をすり寄せてくるのだが、これがまたたまらない。死んだらどうしようと思ってしまう。

動物好きで実際飼わないでいる人の多くはそう考えているに違いない。全く家族の一員だ。

ただ子供にほどではないがお金はかかる。加えてむやみに外出、外泊ができなくなった。

一緒に暮らすことで得られるのは精神的恩恵だけと言ってよい。

ラブラドールに番犬としての価値は見い出

しにくい。

ただこの絶対的「癒し」の効果は何物にも代え難い。

その為には物理的代償の手間を惜しまず、何よりたっぷりと愛情を注がねばならないのだ。

今も傍らで何の憂いもなく無防備にひっくり返ってるそのとぼけた寝顔を眺めるだけでナゴミまくってる私である。